

◇研究ノート◇

智慧と慈悲 (承前No. 3)

——実践としての智慧——

町田 是 正

智慧と慈悲、この問題が大乗仏教の根本であることは周知の所です。従って先字によって夙に論じられ、語り尽されてきたテーマではありますが、ここ数年來、再び仏教とキリスト教に於て再検討がされており、而も宗教学・仏教学の分野だけではなく、哲学・倫理学・文学・社会学・言語学の領域にまで広げられ、英、米、独、仏、伊、豪、印、比、日、などを各国の英知が此のテーマにとりこんでいます。この智慧と慈悲(愛)の問題が再検討されている今日の時代背景は、中近東及びバルカン半島で惹起されている民族紛争、或は科学技術の発達はかえって人間の尊厳性をも顛倒しかねない状況を生み出し、また地球規模で拡大されつつある環境破壊など、いずれも人類の英知を結果して解決の糸口を見いださねばならない秋にきています。こうした意味でも、智慧と慈愛の問題は今日的で而も現実的課題だと受けとめておきたい。筆者は本誌63・64号を借りて卑見を述べてきましたが、当65号にも拙文を載せていただき一応の締めくくりとしておきたい。

目 次

- 一、プロローグ——実践智への誘い——
- 二、分別智と無分別智——分析と直観——
- 三、法華經にみる智慧の実践
- 四、エピローグ——実践としての智慧——

智慧と慈悲(町田)

一、プロローグ—実践智への誘い—

大乘仏教の根本思想は「智慧」と「慈悲」にあります。而もその思想を「修すること sich schulen (D)」を強調いたします。部派仏教時代の「業 karma (S)」(行急)の觀念を「行願・信行・行 carita (S)・sa Ekara (S)」におき代えて、「菩薩行」と呼ばれる「修行 die Schulung (D)」を確立してまいりました。周知のように、菩薩行は一朝一夕にして成るものではなく、繰り返して身心を修める、所謂「修行 bhavana (S)・bhavyaman (S)」が強調されることです。仏教語では「仏道修行」と云い、常に用いる語彙です。時には「行道」と略称されることもあり、ともかく大乘仏教が大事とする一つは、坐して思念することよりも、実践することを勧めていることです。仏道修行のためには、それを修行するうえでの実践徳目がなくてはなりません。大乘仏教に於て、菩薩行に関する特有の実徳徳目として勸説しているのが、「五種法師 dharma-bhāṅka (S)」と「六波羅蜜 sat-paramitah (S)」でありますことは周知の所です。

五種法師の徳目(規範)については、法華經の法師品・分別功德品・法師功德品・不輕菩薩品・如来神力品などに説示されていいます。例えば法師品に於て、

若復有人・受持・誦・誦・解説・書写・妙法華經・及至一偈・於此經卷・敬視如仏

(「法華經」中卷一四三頁)

と示してあります。法華經に於て五種の法行が勸説されるのは、その法行を修することが「一切種智慧」(仏智慧)に到達するための根本とされているからです。

(大正藏八卷・五六頁下段)

(大正藏十二卷・二六九頁下段)

また六波羅蜜行については、摩訶般若波羅蜜經・法華經・無量壽經などに説示されていますが、殊に法華經では方便品・分別功德品で説示されている。分別功德品に於て

況復有人・能持是經・兼行布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧其德最勝・無量無辺・譬如虚空・東西南北・四維上下・無量無辺・是人功德・亦復如是・無量無辺・疾至一切種智

(「法華經」下卷六〇・六一頁)

と示して、六波羅蜜行を修する人に対して、

(限らない種徳の仏智慧を得ることが出来る)

「其徳最勝・無量無辺・譬如虚空」と讃歎し、更に「無量無辺・疾至

ずや仏智慧に至らん

一切種智」と、功德の保証がされています。即ち菩薩衆に課せられた布施 dāna (s) ・持戒 śīla (s) ・忍辱 kṣānti

(s) ・精進 vīrya (s) ・禅定 dhyāna (s) ・智慧 prajñā (s) の六つの実践徳目は「最高の悟りに至る道 parama

bodhimarga (s) ・ das Heilspfad (D)」とされ、特に「智慧波羅蜜」が大事とされ、前の五つの波羅蜜行は、この

智慧に至るための実践徳目として課するとしています。

(上求菩提・下化衆生)

すでに周知されているように、法華菩薩団は自利利他の願行を標榜することで、旧来の小乗僧伽には全く見られな

かった新しい仏教人間像の形成を目指したのであった。謂うなれば、仏教における革新運動であったと云えます。こ

の菩薩団の願行精神は、時代を超えて、民族の壁を越えて、今に生かし、現在に求められている所でありましょう。

いま我々は、遠くアフリカで飢餓に喘ぐ諸民族の悲惨を思うとき、また中近東の戦禍の難民の苦難を思うとき、又

カンボジアに対する平和救援活動の報道を耳にするとき、また私自身、十有余年前に西ドイツの女子修道院内のキン

ダーハイムに収容されていた戦災孤児達の姿を想うとき、理屈ぬきで菩薩行の実践が緊急であることに強い思いをす

るのです。菩薩行が智慧と慈悲に根ざして、一切衆生を利益しようとする「廻向 parināma (s)」を願行とするな

らば、その原点の思想に立ち還って、実践する菩薩行の意味を問い直すことは、今日的課題のように思えるのです。仏教は坐して思念することは大事な行法ですが、より以上に実践する事が求められているのです。

二、分別智と無分別智—分析と直観—

「分別」という語は、元々は仏教語ですが、この語ほど日常の中で使用される仏教語も珍らしい。

新村出編『広辞苑』には次の様に説明している。

「元來は仏教語に由來する。(感覺や想像から獨立した存在……筆者注)心が外界を思ひはかること。事物の善惡、条理を區別してわきまえること。經典・

識見などから出る考え、判断思慮のこと。」

梅棹忠夫・金田一春彦・日野原重明・阪倉篤義監修『日本語大辞典』（講談社）では、

「經驗を積んで道理をわきまえること。その能力。語釈は仏教語にあり、感覺し推量して現象を識別すること。

また區別して判断すること。」

と説明している。

※英語で「分別」に当る語を探しますと、「discretion 正しい判断力の意味をもつ分別」・「understanding 認識する意味をもつ理解」・「analysis 組成を明らかにする意味をもつ分析」などが当ると思えます。またドイツ語で「分別」に当る語を探しますと、「der Verständigkeit 賢名な態度・分別」・「die Einsicht 洞察・判断・理解」があります。

光の広辞苑・日本語大辞典によりますと、元々「分別」の語は仏教語に由来し、語釈は仏教から派生したと解説している。若し仏教語に由来するとすれば、その語原と用法について一応の理解を得ておく必要があります。そこで手

許にある中村元『仏教語大辞典』（東京書籍）を参借して、筆者の補記を付しながら、主な語義と用法を摘記してみます。

「分別トハ、外的ナ事物ニトラワレタ断定・配分スルコト・分チ配付スルコト。」

と説明されているが、その語義の微妙なニュアンスによって、用法が幾つかにわけられています。

(1) 配分スルコト・分チ配付スルコト・その具体的な用例として、法華經の「分別功德 puṅya-pariśaya (s)」が当るとしている。

(2) 区別スル・見分ケルコト。この意に当る語に「vibhagan (s)」があるとしている。

(3) 区別シテ考エル・ワキマエル・ハカライ。この意で用いられる具体的な例として、法華經の壽量品の「憶想分別 saṃjñā-vikalpa (s)」(思惑・あれこれ思いめぐらす)が当るとしている。

(4) ニツ以上ノ事物ヲ分ケテ区別シテ説ク。この意味で用いられる語として、パーリ語の「vibhajjavada」が当るとしている。

(5) 思惟スル。この意に当る語としてサンスクリット語の「kalpanā」あるとしている。

以上、「分別」の語意について見たのですが、仏教語としては通常、サンスクリットの「vikalpa」を用いて、対象を思惟する・識別する心のはたらきとして用いている。つまり哲学の認識作用に当るのです。然し、仏教で云う「分別」の意は、単に識別する・区別する、の意ではなく、分別するはたらきの中に智慧と慈悲の心が関わっている事に留意したいのです。例えば、方便品に於て開会している「開三頭」思想を示している

十方仏土中・唯一乘法・無二亦無三・除仏方便説……

我有方便力・開示三乘法・一切諸世尊・皆説一乘道・今此諸大衆・皆除疑惑・諸仏語無畏・唯一無二乘……

(坂本・岩本訳註「法華経」上・一〇六・一一〇頁)

右の周知の教えにしても、声聞乘と縁覺乘に向つて「仏智慧」は、甚深無量 (durdram duranubodham (s)))

と説くのですが、実はそれは

(唯「」の仏の染物を三種の染物と解説して説く)
於一仏乘・分別三 (tad evakam buddha-dānam tri-ya-nirdeśa nirdisanti (s)))

(「法華経」上卷九八・九九頁)

のごとく、仏智慧 (一仏乘) に至らしめるために分別して解説しているのであつて、明らかに「分別智」を超越した、仏の無量の「無分別智」のはからいが強調されているのです。法華経で説示される「分別」の意味は、或る概念とか価値基準を設けて、認識したり、判断を下すという、つまり「分別智 kalpanā-jñāna (s)」のことではなくて、仏智慧の意味に当る「無分別智 nirvikalpa-jñāna (s)」を教示しようといふことです。

若し「無分別智」について、仏教的表現を改めて哲学的に表現してみれば、対象(事物)を特定概念(価値基準)によつて識別判断することなく、主観や客観の分別を超越した「超越した分別 transzendent der Verstand (D)」に作用する智慧を志向しているのです。

大乘仏教に於ては、分別智(哲學的思案)に対して無分別智(仏教的直観)の実践を勧説していることは明らかです。ところで我々が、現実の問題として「分別智」「無分別智」の実践を問題にしようとしたとき、仏教語の分別智・無分別智という語彙をそのまま用いますと、何か高踏にすぎ違和感を覚えます。そこで日常的な語彙におき替へて、「分別智」を「分析 analyse (E)・die Analyse (D)」と、「無分別智」を「直観 intuition (E)・die Intuition (D)」とした方が解り易く

なりましょう。端的に云えば、原始仏教（根本仏教）は分析的思惟と方法をもつて論じ、大乘仏教は直観的（無分別）な方法をもつて説き明そうとしています。

※「無分別 *avikalpa, nirvikalpa*」の語彙なり觀念が、仏教文獻に登場してくるのは、大乘仏教の成立以後、殊に空思想の後に盛んとなる如来蔵思想の發生・成立に伴うものとされている。即ち、無分別の思想が定着するためには、区別とか差別の觀念が強いと生れてきません。即ち無区別とか平等の觀念が生れることで、そこから無分別の思想が發生してくるように思われる。

周知のように、釈尊は八十年の遊化の生涯に於て様々な問題を事こまかく、分析的に、論理的に説示されています。人間の問題（愛憎・心・苦惱・欲望）、自然、存在、人生觀、世界觀に及んでいます。これらの事は、『經集 *Suttā-nipāta*』（中村元訳注「ブツダのことは」岩波文庫）。『法句經 *Dhammapada*』（中村元訳注「真理のことは」岩波文庫）を披見してみれば明らかです。平易な言葉をもつて説示していますが、然しその説示の方法は、難解な問題について、具体的な例示をもつて理詰めに論理的に論を進め、極めて分析的であります。例えば『スッタニパータ』の偈の頌を參借してみれば、

どんな苦が生ずるのであろうとも、すべて識別作用に縁つて起るのである。識が止滅されるならば、苦が生ずるといふことは有りえない。（七三三四偈）

「苦しみは識別作用に縁つて起るのである」と、この患いを知って、識別作用を静かならしめた修行者は、快をむさぼることなく、安らぎに帰しているのである。（七三五偈）

（中村元訳「ブツダのことは」岩波文庫二三四頁）

とあります。僅か一例にすぎませんが、全篇が右に示した方法で説示されており、極めて分析的であることが理解

されます。

釈尊滅後の僧伽は等しく悟りを目指して修行した。その修行は戒を守り、教法を研究することであったが、その修行することが期せずして経蔵と律蔵を伝持することとなった。周知のように「経蔵 Sūtra-piṭaka (s)」と「律蔵 Vinaya-piṭaka (s)」に説かれている仏教を原始仏教と呼び、経蔵に含まれている經典を「阿含經 āgama. sūtra (s)」と称した。原始仏教の思想の特徴は、理性的・合理的・分析的の性格が強いとされ、また倫理的な雰囲気を感じわすことも特徴とされている。

* 原始仏教の特色が分析的・理論的であることは、例えば、阿含「増支部 Anguttaranikāya」中に集成されている「四諦 catv-arya-satya」(釈尊の初転法輪における根本教説とされる)とか「八正道 aṣṭāṅga-mārga (s)」(苦惱の断滅に導く八つの正しい実践徳目)の教説は説明的であり分析的ではありません。また人間観察(人間存在の問題)についても、極めて分析的で精緻であって、「五蘊 pañca-skandha (s)」と「六根 ṣaḍ-īndriya (s)」の概念を導入することで合理的に説明しようとしていました。

原始仏教の基本的立場は、「諸行無常 (すべての現象は変化して止むことない) Sarvaśaṅkārā anityāh (s)」・「諸法無我 (すべての存在は永遠不變の本質を有しない) sarvadharmā anātmanāh (s)」・「涅槃寂靜 (煩悩の炎を吹き消して心が静かに安んずること) śāntaṁ nirvāṇam (s)」の三法印にあるとされている。やや具体的に繰り返して言えば、我々人間は限らない欲望と、人生無常との矛盾の渦中に投げ込まれて苦惱し、また争いを生じている。釈尊はそれらの根元が煩悩(貪瞋痴・慢心)と「無明 (説明に欠けてゐる) avidyā (s)」にあることを明らかにしていった。そして煩悩を断滅して、煩悩の束縛から離脱して心の自由自在の境地(涅槃寂靜・解脱)に至る方途(煩悩と悟りの構造)について、四諦・八正道・そして「緣起 (原因と条件によつて一切のものを生ずる) pratyā-samutpāda」の説をもつて教えられたのであった。

仏教の目指した目標が「智慧に至る道」にあったのですが、原始仏教と小乗教団に於ては、それを「分析の教え」(分別智)に主眼をおいて、精緻な理論を展開したのであった。現在の我々は大乗仏教の思想を享受していますから、我々の立場からすれば、原始仏教の思想は学問研究の対象としては汲み尽し得ない魅力があります。然し今日の要請がされている「智慧の実践」の立場からすれば、聊か違和感を覚えるのです。然し大事なことは、(評釈は宇井伯賢博士系統)原始仏教(根本仏教)が煩瑣で分別智の教説と云うだけで、これを拒絶する態度は好ましくなく、我々は仏陀ゴータマから流れ出る智慧の泉を汲みとる努力を忘れてはならないと思います。

三、法華経にみる智慧の実践

仏陀ゴータマは、縁起の理法をもって、四諦・八正道の思想と実践の徳目を構築され、仏教が「智慧の道」であることを教説された。

さとれる者(仏)と真理のことわり(法)と聖者の集い(僧)とに帰依する人は、正しい智慧をもって、四つの尊い真理を見る。すなわち(1)苦しみと、(2)苦しみの成り立ちと、(3)苦しみの超克と、(4)苦しみの終滅におもむく八つの尊い道(八聖道)とを見る。

(中村元訳「ブツダの真理のことば」岩波文庫三三八頁)

右の中村博士訳注に成る『真理のことば』は、パーリ語原典では「Dhammapada」と云い、漢訳で「法句経」と称せられている。先の詩偈はダンマパダの一九〇・一九一偈のもですが、併せて二七三・二七四偈も参照されることとで、仏陀ゴータマが如何なる想いを込めて教説されているのか、その想いが伝わってきます。

仏教の出発点が「智慧の道」にあるとすれば、我々はそれに帰依しなければならぬ。而も我々のすべてが「一切衆生・悉有仏性」(大般涅槃經・師子吼菩薩品)の可能性を有しているとすれば、原始教団・小乗教団の特定エリートの分析的思维的領域を超越して、上求菩提・下化衆生の自利化他精神を基盤として、大衆と共に乗車できる大乘の教え、菩薩道の根幹としていくべきであると思います。

大乘仏教の教説、就中、法華經の教説(表現形式)は、きわめて文学的(譬喩的・象徴的)で而も直観的に語られており、理論や分析的方法を避けて、むしろ具体的に菩薩道(智慧の道)の実踐を説示しています。

その一例として、常不輕菩薩品における不輕菩薩の但行禮拜の説示は象徴的であります。

我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、当作佛

(坂本・岩本訳注「法華經」下巻・一三三頁)

避走遠住、猶高声唱言、我不敢輕於汝等、汝等皆當作佛

(「法華經」下巻二二六頁)

不輕菩薩、往到其所、而語之言、我不敢汝、汝等行道、皆當作佛、諸人聞已、輕毀罵罵、不輕菩薩、能忍受之

(「法華經」下巻一四四頁)

右の説示は、日蓮教学に於ては特別の意義を示唆している所とされ、日蓮聖人御自身も法華菩薩行の規範とされました。聖人は『寺泊御書』に於て

法華經三世説法儀式也。過去不輕品今勸持品、今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可為不輕品、其時日蓮即可為不輕菩薩。

(昭定遺・五一五頁)

と示して、不輕菩薩の但行礼拝と御自身の忍難色説とを照合して、法華經行者の自覺を深められている。

今は日蓮宗字に於ける教學的意義の言及は惜くとして、常不輕品に説示される但行礼拝の実践は、法華菩薩道における限らない慈悲と智慧の実践を教唆しています。どんなに悪口罵詈・杖木瓦礫に遭遇しようとも、「亦復故往、礼拝讚歎、而作是言、我不敢輕於汝等、汝等皆當作仏故」(「法華經」下卷一三四頁)と、但々ひたすら礼拝の行に徹した。礼拝行勸説で大事なことは、不輕菩薩が讚歎合掌して礼拝した対象は、決して聰明有知の人々だけではなく、無知愚昧の人々も大勢いた筈です。人々を差別することなく礼拝したことです。だから礼拝・讚歎に値いしない存在と思っていた者にとっては不快の念を生じ杖木瓦礫をもって報いたのであった。それに対して、「汝等皆行菩薩道・當得作仏」と合掌礼拝したのは、(一切衆生・悉有仏性)「人々は皆、仏法の器」なることを知らしめんとする慈悲と智慧の発露であり実践であつたのです。

法華經には「七喻」の譬説が語られてきますが、その中で今、この抽論の問題志向と徹して、筆者の関心を引くのは信解品に語られる長者窮子の譬喩であります。(法華經の構成上からすれば本品はそれ程に重要でない)

信解品の開卷冒頭、四人の長老声聞衆による告白から始まります。

爾時、慧命須菩提、解第1スプーテイ、摩訶迦施延、論第2マハー・カーティヤヤナ摩訶迦葉、行法第2マハー・マッドガリヤヤナ摩訶目犍連、神通第2マハー・マッドガリヤヤナ我等居僧之首、世尊に向つて合掌し世尊を仰ぎ身体をかめて礼拝す。世尊は次のように云つた。他の衆僧では長を扱われ、齢を重ね老衰していたので、まことの境地に達することが出来たと思ひこみ、恭敬、瞻仰尊顔、而白仏言、我等居僧之首、年近朽邁、自謂已得涅槃、無所堪任、不復進求、阿耨多羅三藐三菩提……

(「法華經」上卷二二三頁)

右の四人の長老は、二乗声聞を代表する仏弟子たちですが、既に修行を積み小乘涅槃の証りに甘んじ、「無量の宝

aprameya ratna (s)」を得たと思ひこみ、また仏の証(仏智慧)には到底達することが難事と思ひこみ、進んで仏智慧を求めることをしなかつたのでした。然し同修の舍利弗（智度第一・シャーリ・ブトラ）に対して、大乘一仏乗の得脱の記別が授けられるのを眼前にして、二乗声聞にも無量の珍宝が得られるとの確信を得て感激を覚えていくのでした。

そこで四人の長老たちは、次の様にのべて、
世尊我等今者、楽説譬喻、以明斯義……

(「法華經」上卷二四頁)

長老たち(声聞乘)は、自らの迷惑に煩い、苦惱の世界に繫縛されていたこと、そして仏乗の世界に対して畏怖を抱いていたことを告白し、そこで「長者鷄子」の譬喻を述べ、その中で仏智慧に照らされて次第に菩提の覺智に目覚めていく過程を鷄子に託して述べている。

貧乏な男は、長者の莫大な財産を譲り受けるでしょう。自身に欲がなく、その中から何も買わず、皮一升の値の金も取り出さないでしょう。自分は身だと思ひ、從爾時鷄子、即受教勅、金銀珍宝、及諸庫藏、而無怖取、一餐之意、然其所止、故在本処、
來のようにわらわきの小樹に住んでいられるでしょう。下劣之心、亦未能捨……

(「法華經」上卷三三六頁)

右の譬説の意味は、「貧しい人 daridra-purusa」(鷄子)は長者(父)から沢山の財貨の管理をまかせられていながら、これを欲しいと思わず、かえって「貧しい思い daridracinta (s)」(二乗声聞の立場)で長者に仕えていた。随って鷄子は高度な「判断力 udarasañña (s)」を有し、また「有能な護持者 sakta-paripalaka (s)」であるにも拘らわず、自己の本性(本質)を見極め得ないでいる状態を説示しています。

四人の長老は、自分達が菩提の覺智に目覚めないでいる状態を次の様に述べている。

世尊、我等以三苦故、於生死中、受諸熱惱、迷惑無知、樂者小法、今日世尊、令我等思惟、顯除諸法、戲論之弊、
我等於中、勤加精進、得至涅槃、一日之價、既得此已、心大勸喜、自以為足……

(「法華經」上卷二三八頁)

〔授記で衆生から記別をうけた四人の仏弟子〕迦葉・須菩提・迦旃延・目連
四人の声聞(阿罗汉)は、自己の殻にとじこもり、利他の行を欠いた修行を反省して、次のように述べている。

世尊以上便力、説如来智慧、我等從仏、得涅槃一日之價、以為大得、於此大乘、無有志求、
我等又因、如来智慧、為諸菩薩、開示演説、而自於此、無有志願

(「法華經」上卷二四〇頁)

信解品からの参借が多くなりました。法華經は慈悲と智慧を説く經典と云われていますが、その説示の大事な点は、既に見た常不輕菩薩品・信解品の事例からも解かりますように、仏智慧に至るための実践を強く勧めていくことです。法華經は坐して沈潜黙想して論理の筋道を思惟することを強く斥けています。

常不輕菩薩による但行礼拝の説示は、恣意と傲慢の態度を絶対に許さず、忍耐と精進、そして意志と行動を勸奨し、一切衆生・悉有仏性の根柢に立って、無智者の目を開かしのめる利他の実践が強調されています。また長者窮子の譬喩にしても、窮子に託して自閉症候群とも云える二乗声聞の殻を打破して仏智慧に至る実践が勧められています。

從地涌出品に於て智慧の実践が次のように勸奨されています。

此諸衆生、始見我身、聞我所説、即皆信受、入如来慧、除先修習、学小乘者、如是之人、我今亦令、得聞是經、入於佛慧

(「法華經」中卷二九四頁)

智慧と慈悲(町田)

阿逸汝當知・是諸大菩薩、從無數劫來、修習仏智慧……仏の智慧にしたがって雙方功の間修した。……如是諸子等、學習我道法、晝夜常精進、為求
となく修ることがない。この最勝の「まとり」を得ようとして夜となく晝
すべての別業を擱きおこして勤り知れぬ智慧の力を獲得している。自問をもつて教を説く。
仏道故……志念力堅固 常勤求智慧 説種種妙法 其心無所畏

〔法華經〕中卷三二〇・三二二頁)

謂うまでもなく、法華經に説示される「仏智慧 buddha-rajā」とは久遠本仏の智慧ですが、大事なことは、この
(種別智慧・總相に反対)
仏智慧は巧説方便して衆生救済の機能を果すことです。即ち超越的な久遠本仏が、その智慧をもって此の娑婆の現

実を「如実知見 yatha-bhūtam jñāna-darśana (s)」して、衆生救済のための手段をなすと説示していることです。

我々は仏智慧を讃歎し、仏智慧に至るための菩薩道の実践を怠ってはならないのですが、法華經に於て仏智慧を讃
歎するとき、その表現法として「甚深無量 gambhīram aprameya (s)」とか「難信難解 durdīṣam duranubodhān

(s)」のように形容詞または副詞を冠して、仏智慧に至ることは容易ではないと歯止めがされていることです。或は

回思議・深遠・福德・不可量・不度量・無上などと副詞を冠して修飾し、仏智慧が微妙で人の思惟能力(分別智)を
超え、限りなく深く清浄なることを強調しています。法華經に於て仏智慧に対して最上級の修飾をもって讃歎するの

は、仏智慧が「悟り」の本質(本仏の生命)とされているからです。

過日、朝日新聞紙上で我國を代表する科学者・早石修氏と 福井謙一氏が次のような発言をされていた。
(平成元年一月五日、新春対談) (大阪バイオサイエンス研究所長) (一九八一年ノベル化学賞受賞)

早石氏は「論理(分別智)も大事だけれども、最後は直観(無分別智)だと確かに思う」と。

福井氏は「科学的直観というものは、寝ころんでいては養成されない訳で、矢張り経験・学習・情報の収集、それ
から集中的な思考などの結果だと理解すること」。

と云われていましたが、当に法華經に説示される智慧の意味と、その実践することの大事を云われている様に思わ

れる。二人の科学者とも法華經に関する仏教学的な理解はお持ちではないと思いますが、「智慧」についての理解が法華經の説示と同調することに、筆者は共鳴するのを覚えます。

四、エピソード—実践としての智慧

法華經に於ける智慧の表現語彙は、通達大智(序品)・智慧甚微妙(方便品)・常修仏慧(譬喻品)・智慧深遠(藥草品)・如来無礙智(化城品)・一切種智慧(法師品)・智慧宝藏(安樂行品)・深甚智慧(涌出品)・慧光照無量(寿量品)・大善救力(不輕品)・福德智慧(藥王品)・广大智慧(普門品)等々、その表現の仕方は多様でも最上級の形容修飾語を冠して説示している。

また方便品には

盡思共度量・不能測仏智……盡思共度量・亦復不能者……咸皆共思量・不能知仏智

(「法華經」上卷七二頁)

と繰り返し、人の思惟智をいくら沢山集めても仏智慧には及ばないとしている。仏智慧は人の理解する能力を超えている。だとすれば我々に残された唯一の道は、仏智慧について「あれや、これや one thing or another」と思いつめぐらすのではなく、只ひたすらに仏智慧を願い求めて菩薩道を実践することに意義が生まれてくるのではなからうか。

法華經では智慧を得るための実践として、六波羅蜜行を勧説しています。たとえば化城喻品の中で

以無量因縁・種種諸譬喻・説六波羅蜜・及諸神通事・分別真實法・菩薩所行道・説示法華經・如恒河沙偈

(「法華經」中卷八二頁)

と説示して、仏は菩薩団のために幾百万という譬喩を用い、神通甚深の智慧を縦横に發揮して、智慧を得る実践法として六波羅蜜を強く勧めている。

日蓮聖人は開目鈔・本尊抄に於て、無量義經の六波羅蜜の自然在前の經文は、単に經文の理だけではなくて、

妙者具足、六者六度万行(六波羅蜜の實踐…筆者注)諸の菩薩六度万行を具足するやうをきかんとをもつ

(昭定遺五七〇頁)

と強調される所で、日蓮聖人が方便品の「欲聞具足道」と積された意味は此処にありましよう。道場内の修行と社会的実践とを兼ね備えた六波羅蜜の事行を超へて理の一乘觀法が生れ、理行の十乘觀法を超越して再び社会的実践を目指す唱題事行が生れ、此処に觀念としての智慧が打破されて、実践としての智慧が認められるのではなからうか。結論を急ぎすぎましたが、ともかく菩薩の実践倫理として、智慧の実践について往昔七百年、日蓮聖人が教唆されている事は確かであります。